

第8回 平成27年度 第2回 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 平成27年8月10日(月) 午後7:30～9:45

◆開催場所 東近江市役所 新館3階 313会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾昌峰、福田純子、高頭勇次、小倉昌和、太田裕子、森下瑠美、
築山清美、北井香、井尻久嗣、大橋正徳、板倉元
(欠席:飛田重金、楠神渉、荷宮将義、森田徳治)

事務局 まちづくり協働課 黄地、村田、浅田

◆傍聴人数 0人

◆議題

- ①「共に考え、共に創る」わがまち協働大賞の選考について
- ②協働ラウンドテーブルについて

◆会議録

開会

【事務局より開会のあいさつ】

(委員長)

こんばんは。皆様遅くからご苦労さまです。今日は主に協働大賞の選考と、みなさん方に議論していただいているラウンドテーブルについてもそれぞれのチームの情報を共有して、確認して目指すべきラウンドテーブル像をみなさんと一緒に作っていきたいと思っています。ラウンドテーブルについてはまた、後で議論したいと思いますが、今私はいろんなところで、地方創生とかの関係で関わっていますが、東近江で議論しているラウンドテーブルはかなり先取りしていける可能性があって、重要なものになってきているなあとしますので少し眼差し感を合わせながらいいものにしていきたいと思います。今日も熱心な議論をよろしくお願いします。早速ではありますが、議事の方に入りたいと思います。まずはですね、協働大賞の審査についてということで、議題1の「共に考え、共に創るわがまち協働大賞の選考について」ということで資料を作っていただいています。実際に募集も始めていただいていますので、その情報や今日われわれが何を議論しなければいけないのかならないのかということも含めて事務局から説明をお願いします。

(事務局)

それでは第1番目の議題「わがまち協働大賞の選考方法について」ということで前回みなさんにご意見をいただいたことをふまえて、事務局で案を考え、深尾先生にも相談し選考の方法を考えました。皆様方にそれについて、皆様方に実際選考していただくことになりますのでご確認とご意見をお願いしたいと思います。応募件数が50件を想定して資料1に選考方法を書かせていただいています。

選考のシートが資料2です。選考の基準について資料3を作成していますのでご覧になりながら説明をしたいと思います。応募件数は50件を想定はしていますが、募集をして今のところ1か月たっていますが、受付件数は協働大賞の応募が4件で副賞が1件と言う状況です。まだまだ皆様方にお力を借りて応募も声かけをしていただきたいと思います。

資料1をご覧ください。第1次選考は、9月4日までで事務局で応募要件を確認するという事で、応募要件さえ整っていれば第1次選考はクリアということで考えています。次回の委員会の9月25日に第2次選考で書類選考をお願いします。書類選考の方法ですが、50件応募があった場合、皆様に全部を見ていただくのは大変なので、15人の委員さんを5人ずつのチーム分けをして1チーム15～16件を選考していただきたいと考えています。名簿順で5名ずつのチーム分けをさせていただいています。これは案と言うことです。委員さんの1チームで事例を15～16事例を担当してもらって選考し、9月23日までに2次選考シートで採点を行ってもらって事業へのコメントもご記入をいただきたいと思います。委員のみなさんもいろんな活動をされていると思いますので、運営に中心に関わっていただいている団体の事例に関しては、応募や推薦していただくのは大いに結構ですが、運営の中心に関わっておられる事例の選考は具合が悪いのでご遠慮いただくということで2次選考シートにチェックしていただくようにシートを作っています。

まず流れを説明します。事務局が委員さんの2次選考のシートの点数とコメントをまとめて一覧表にして合計点数の高い順に並べます。関与していただけない事例の場合にはその委員さんの他の委員さんの合計点数の平均点として加算させていただきたいと考えています。

各チームで点数順に7事例、それぞれのチームの上位7事例、3チーム分で21事例を最終選考の候補として委員会の方で一覧表をもとに協議をしていただき、最終選考に7件以内と言うことで21件の中から7件を選んでいただきたいと思います。7件というのはヒアリングをスケジュールな事とチームで行っていただくことを考えるとヒアリング可能な数ということで7件以内としています。採点の基準を作っているので資料2の2次選考の選考シート、4ページをご覧ください。1事業について1シートを選考する委員さん全員が1枚ずつ書いていただきたいと思っています。

選考していただく視点については、応募していただくときに募集要項にも書いていますがその時は協働性、着眼点・インパクト、協働事業の成果、波及性・継続性、発展性の5項目であったが、深尾先生と相談する中で大賞にふさわしいかどうか委員さんの観点でみてもらうという部分を加えるということで総合を加えて6項目となっています。応募していただくチラシに書いているが、協働性10点、着眼点・インパクト10点、協働事業の成果5点、波及性・継続性5点、発展性10点に加えて総合でここで決まる部分があるが配点が20点で60点満点で評価をしていただくことになってます。

傾斜配分しているが、この審査については、エントリーシートだけの審査であるので、それだけで判断するのが難しいということも考慮しての配点にしています。ヒアリングに行くと言いたいことが聞けるが、エントリーシートだけではわからないのでそのことも含めて配点を考えています。

事業へのコメントについては前回の委員会で、応募されて、1次選考通ったものに関してはコメントしていこうという委員会での意見であったので、50文字程度書いていただくこととなります。すべてのコメントを事務局でまとめて、フィードバックしたいと考えている。採点の基準はどの程度ができていたら10点なのかかわかりにくいのであくまでも参考ですが5ページの採点の基準表でそれぞれ6つの項目につきまして、それぞれ10点の満点をつけるのと真ん中ぐらいの基準と0点と3段階に分けて配点を書いています。このような要領で2次選考をお願いしたいと考えます。まずは、ここまででご意見ををお願いします。

(委員長)

ありがとうございます。今の説明していただいた要領で少しスケジュール的な事を考えると50件を想定するという事ですのでそれに伴う審査体制を考えていただいているということです。

(委員長)

50件の今なん件ですか？

(事務局)

今4件です。

(委員長)

締め切りはいつですか？

(事務局)

9月4日です。

(委員長)

皆様方にPRもお願いしたいと思いますが、第1次選考は要件で判断して事務局で機械的にはねていただく。ほとんどないと思いますが、皆様方にお手を煩わせることのないよという事で、事務局が悩むものに関しては、切らずにそのまま残していただくと思います。第2次選考の所は、少し件数が多いので、3チームの分かれていただいてそれぞれ15~16事例を審査いただくこととなります。皆様方に今日チェックしていただきたいのは、流れの方はいいですね。やり方は、50件すべてみるという方がおられればそれでいいですが。件数が何件になるかによって、弾力的な運用があるかもしれませんが。応募総数20件であればみなさんに20件見ってもらう方が合理的な気がします。そのところは最終的に事務局に一任をさせていただきたいと思いますが、50件来た時にはそれぞれ15~16件を皆様方にみってもらうとうことでよろしいですか。その上で15~16件を皆様方に点数をつけていただくのですが、4Pの選考シートと5Pの審査基準表をみてもらって、少しエントリーシートをベースに審査をしていただくこととなりますが、このエントリーシートはエントリーを簡易にしようという事で情報量があまりありませんので、最初総合がない状態だとそんなに点数の差がつかないのではないかと懸念されたところがあります。

今回私の方で提案させていただきましたのは最初なのでよくわからないところがあるので、我々も試行錯誤のところがあるので選考していただく審査委員の皆様方の見識に委ねるところがあってもいいのではないかとということで、総合と言うことで大賞にふさわしいかどうかということで20点を配点しています。それも是非を皆様でご議論いただきたいと思います。その中で皆様がどういうところが大賞にふさわしいか着眼されたかということが来年度以降の審査基準にはね返っていけばいいかなと思います。皆様方がそれぞれ15~16件ずつ見ていただいた時に、この案件はこういうところが素晴らしいと思ったということを全体の審査の時に言っていただくことによって、それがなるほどということになれば審査基準として来年度以降全体の審査基準になっていけばいいかなと思います。初年度でわからないので、皆さま方の見識で少し基準以外のところで評価をしていただきたいというのが今回のご提案になります。

まずは、今までの流れのところと、実際に点数をつけていただくというところで少しつ

ける気持ちになって選考シートとかや採点基準のところを見ていただいいていかがでしょうか。これはもう少しこういうところを評価したほうがいいのではないかということをご議論をいただければと思います。

(委員)

資料3の配点のところでは最初の項目5つは10、5、0のどれかを選んだらよいということですか。それと最後の20点のところは20点付けても18点付けても良ということですか20点満点のところだけですか。

(事務局)

説明が不十分だったのですが、これは基準なのですが加点とか減点をしていただいで整数であればこの間で9点とか8点でもつけていただければいいので、必ずしも10点か5点か0点と言うわけではありません。

(委員長)

例えば協働性のところは協働の良さが発揮されているかどうかというところでそれぞれの役割分担をみんなが理解して進めているのが10点でそれぞれの役割を担当者のみが理解し、進めているのが5点となっているがそういう幅の中で皆様方が8点付けても5点付けていただいても良い、皆様方の基準でつけていただければよい。ただある程度委員会として揃えなければいけないので基準はこれくらいにしましょうという目安として基準表は使っていただいたら良いと考えています。

(委員)

エントリーシートをこれから書こうと思う人間の立場に立つと、この基準表をみたら点数がとれるように書けるかもしれないけれど、チラシや企画書を見ただけで審査できるのかなあとちょっと、もらえるように書くにはどうしたらいいのかと考えてしまうところがあるのですが。

(委員)

エントリーシートシートを実際に書きましたが、実際に書いてみて、自分が審査する立場で書いて出したが、結局アピールポイントのところをどう書くかで審査は変わるのかと思う。文書力がある人間がつくと良い評価が得られて、文章力がない人間が書くと失敗するのではないか。そこでヒアリングが重要になる。

(委員長)

今お二方が言っていただいたとおりでヒアリングが大事なですね。基準としては大項目としてはこういうことを評価しますよとして基準としてはチラシも出してあるのです。そういう意味では少しこのシートだけではというところは当然あるので、形式上でやってしまうと見通せないのであえて皆様方にフリーの20点を持ってもらっている意味合いはそこにあります。本質的なところはたぶんヒアリング以降のところである程度きちんと評価していかなければならないと思います。少し7件や8件をあぶりだすために、少しどういう基準が必要か今おっしゃっていただいた観点で、文章が得意な人が書くと通るとするのはその通りです。そのところをヒアリングの段階できちんと実体的なところをご評価いただければと思います。

(委員)

いくつかの団体が協働していますね。どこから書けばもらえるかというようなこともあ

るのではないのでしょうか。若者とまち協と老人が協働している場合、若者がこれを提出するほうがいいですね。どこからエントリーするのが一番いいのかなとなるべくもらえるところにエントリーシートを書いてもらえたらと思っているのですけれども。

(委員)

今の発想はちょっと違うのではないのでしょうか。誰が出しても協働の内容がある程度上位に入った場合、どこが出してもわかってくるのではないかと思います。選考シートの選考方法のところで、視点について整合性をとっておられるのですが、具体的に注釈をざっと読んだ感覚では、非常に似通った審査基準になっている気がします。そのへんを議論したほうが良いのではないのでしょうか。例えば、協働性と協働事業の成果は視点だけを見ていると感じが違うのですが、注釈を読むと同じような気がします。もう少し具体的審査基準を示さないとわかりにくいのではないのでしょうか。協働の良さは本来の協働大賞、アワードの目的ですからいわゆるつながり、いろんな団体のつながりがどれだけ良さが出ているか、各団体やグループ、個人のつながり度みたいな評価とか、協働事業の成果はそれによってやろうとする事業がどれだけ結果としてできているかということ。意思統一しないと無茶苦茶になる可能性があるかなと思いました。

波及性・継続性と発展性も非常によく似た項目のような気がします。注釈が将来幅広く活用され、広がっていく可能性、次が事業展開に対しての可能性、その差を個人がどう審査する者が捉えるかというのがもう少し具体的にするか、或いは非常に乱暴ですが、同じ項目で審査しちゃう。点数の配分をもう少し考えるというのもひとつ案かなと思いました。アワードのそもそもの狙いが何なのかということから点数配分を考えないといけないと思いますが、概ねこのへんでいいのかと思うが、波及性・継続性の波及性はこのアワードのそもそもの狙いだと思います。その事業がいいとか悪いとかでなく、そういうことをすることによっていろんな展開に可能性があるかひとつの触媒みたいな大賞ではないのかなと感覚的に思います。こんなことをやったらこんな展開ができるのだというつながりや展開の良さをも少し点数をアップする。総合があるのでそれがカバーできるが、そのあたりの意思統一をしないとすごく差が出ると思います。

(委員長)

今のところを少し議論しましょうか。今のご指摘では波及性・継続性と発展性は一つの項目でいいのではないかと言うことと、特に波及性みたいなところはこの事業自体の波及性と言うよりは協働することによって、地域のいろんな人たちの参加度合が高まって、ちょっと大きい言葉でいうと自治力というようなものが高まっていていろんな問題がそういうつながりの中で解決していくようなきっかけになったりとかそういうものが地域に根付いていくような可能性とかそれを発展性とか波及性とかいうところにおいたらどうかというご指摘だと思います。その事業自体の波及や継続とか発展とかと言うよりは協働の今回を契機にしたことでいろんな広がりがあったことをどう評価するかという観点も必要ではないかと言うご指摘だと思います。どうでしょうか皆様方のご意見は。実際に作る立場になってください。実際に出てきたものをみないとイメージがつかないのも事実です。

(委員)

採点基準を作る方にいたので、一回試しにつけてみたのですが、なかなかエントリーシートだけで、読み解くのは不可能に近い。そんなに具体的に書いていないので、これが審

査基準ですよと言うのを書いてはいるのですが、見て読んで、こうなのだろうな、ああなのだろうなと想像しながらでないといけない。いろんな資料を読ませていただいて協働大賞の中で着眼点とかいろんな視点で見るとこれが一番全国的な基準になっている感じではあったのであげさせてもらったが、読み説くのは難しい作業にはなると思います。どんなに細かく書いてあっても自分の価値観になって来るので、総合ですべてを補ってもらえないのかなと思います。

(委員長)

最終的にはそうだと思います。やってみようということだと個人的には思っています。採点基準のところていくと7~10に絞り込んでから厳密にこの表の項目である程度厳しい審査をしていけばよいが、前段のところはやはりかなりな幅が出てくると思いますので少しそこらへんは細かい採点基準と言うよりは皆様のバックグラウンドもふくめて、少し今年はざっくりと、これはヒアリングすべきだということや、こういうものを押し上げたいという皆様方の主観でやっていただいていいかなと思います。提案としては私の方で全部見ようとは思っています。20件ぐらいだと皆様に全部見てもらおうと思いましたが50件来たら、やってやろうという人がいたら少し全体を通してこれはこうですよねというもシェアできるし、いろんな限界とかしんどさはあると思いますが、やってみようと思えます。反省はいろいろと積み上げたいと思います。確かにこのシートだけで項目をみるのは難しいのでチラシとかを見て寸借していただくことが非常に大事です。何件ぐらい出そうですか。

(事務局)

30件以上だと思います。

(委員長)

何件ぐらいまでなら全部審査してもいいですか。

(委員)

やったことがないので。

(委員長)

今日皆様の中で全部やった方がいいというのもひとつの発想ではあります。

項目をもっと減らして全部見たほうがいいのかというのも一つです。馴らすという意味で行くと3個ぐらいの項目にして、2次審査は全員が全部見るというのも一つだと思います。

(委員)

最初は全部知っておきたいです。場数を踏みたいです。

(委員)

これは困った時のためのものだと思います。これを見ながら50件見ようとするの大変です。最初から落ちていくものはわかると思います。落ちていくものの中にこれは絶対良いというのは感覚的にあると思います。絶対良いのと落ちていくというのはわかると思います。それを省いた中で、考えればよい。成文化、文章化するのが難しい。初めてなので。50件見られる形にしたらよいのではないですか。そうしましょう。

(事務局)

皆様の前向きなご意見は素晴らしいです。落ちるものも含めてコメントを皆様に書いていただくことを考えて事務局的に15~16件かなと思いましたがそれだけお考えいただいております。

(委員)

それはそんなに難しくないと思います。いわゆる減点方式でどうしてダメだったかを出せばよい話ですね。総合点を出すチェックリストで、この項目がダメだったのということ言えばよいと思います。万が一総数が少なければ、より詳細にコメントさせていただいたら良いと思いますし。

(委員長)

それではすべて見ましょう。事務局のコピーの枚数が増えますが。提案ですが、20点、こういうこと全体を意識して総合のところでも20点満点、20点でなくてもいいのですが、点数をつけましょう。皆様方の中でそれぞれ軸を作ってもらったらいいのです。例えばこの中で自分は成果にこだわるということであれば、それに着目して点数をつけていただいたら結構です。ただ、全体的に皆様方にポイントを提示していますので15点だとか。30件来たなら30件並べてもらって全部順番付けた時に自分が押し上げたいというのが上位10件ぐらいに入っていれば、妥当な評価だと思います。最終選考のいわゆるヒアリングを終えたところは、今みたいなものをもう少し項目立てて評価できる素材を並べて、現実的にはどれが一番にしなければいけないかと言う話がでてきますが、それもだいたい見ているとわかってくると思いますので。採点方法についてはどういうものが出て来たかによって私と事務局の方で相談させてください。

今日のところはみなさんのお言葉に甘えると言うか、どうなるかわからないので全申請書を審査していただくことにしたいと思います。それぞれ皆様方に点数をつけてもらいます。点数はどうでしょうか。

(委員)

100の方がわかりやすい。

(委員)

低いほうがつけやすい。

(委員長)

高いとメリハリがつかない可能性があります。というのと幅があるので例えば80点アベレージつける人と、20点つける人がいると幅が出る。どうしましょう。

(委員)

10点がいいのでは。

(委員長)

では10点満点で付けるということをお願いしたいと思います。提示しているポイントで総合的に判断をお願いしたいと思います。順番を付けたものをベースにヒアリングするものをどうするか、もし、固まっていたら、団子状態であれば、出来るだけ多くの事例をヒアリングして詳しい状況を把握してその段階で切られることをなくしたいと思います。件数が何件かによっても変わってきますし、このように議論をしてもこのまま4件から選ぶということになるかもしれませんし。そこは出たところ勝負なので。とはいえ、たくさん応募があるということ非常に大事なので、先ほど事務局が30とおっしゃいましたがそこまではぜひいきたいと思いますので広報のご協力をお願いします。ちょっと大きく覆してしまいましたが。皆様方にはちょっと遅い夏休みの宿題みたいになりますがご審査のほうをよろしくお願いします。

ヒアリングのところですが資料4以降になりますが、こういうことを聞きましょうということで作っていただいています。申請書を読んでわからないことをお聞かせいただくということになると思います。この項目すべてを埋めましょうということにはならないかもしれませんが。わからないことをこの項目に沿って聞きましょうということになると思います。2人ずつぐらいで、皆様方に回っていただきたいということになります。これも日程的にいくと25日があるのでみんながつけたものを持ち寄ってそこでもう一度議論することでもいいですか。出てこないとわからないので。全員が全部審査していただくことにしましたので、お手間ですが、ヒアリングでどんなことを聞けばいいのかを、点数付けていただきながら考えていただいて、こんなことを聞きたいということメモしていただいてヒアリング対象のものに何を聞けばいいかと言うことを25日の日にオーソライズしたいと思います。今日は様式等の議論をしてもしょうがないので、今日の議論はそれぐらいにしたいと思います。出たものを見たほうが合理的だと思いますのでそういう形で、皆様方にはお手間をとりますが、よろしくお願いします。

皆様方には維持選考が終わったものは郵便で届くのですか。

(事務局)

スケジュールのとこ締め切り9月4日が終わってから事務局でまとめて、9月15日から16日に50件なら50件分を皆様方に送ります。日程的に厳しいのですが、シルバーウィークがあるのでその間に作業をしてもらうことになりますが、25日の2次選考に間に合わそうとすると事務局の作業もありますので23日の必着でメールか郵送で送ってもらうことになります。短い時間でお休み中の作業になってしまい非常に申し訳ないのですがよろしくお願いします。

(委員長)

23日までお休みなので24日の午前中に届くように送っていただくようお願いします。それと、事務局で第1次選考のところを出来るだけ早く送っていただいて、そうすると週が繰り上がるので、締め切りは変えずにできるだけ時間をとるような形で工夫をしていただければと思います。日程的にはこれでよろしいでしょうか。よろしくお願いします。

それと、日程を見ていただければ9月25日と11月26日が選考と言う形になります。この会議は皆様方に最初に確認していただいたように一応公表ということにしています。傍聴の方がおられたら開かれている会議になっています。ただ9月25日と11月26日は審査を行うということで、いろんな評価的な情報が飛び交わざるを得ないのでここはひとつご提案ですがこの審査にかかる2日間に関しては非公開と言う扱いにさせていただきたいと思いますが、みなさんにお諮りをしたいと思います。そこまで、バリューがあるかということもありますが。非公開と言う形でよろしいでしょうか。それではそういう扱いにさせていただいてよろしいでしょうか。それではそのように取り扱いたいと思います。

今、決めておかないといけないのはその程度でしょうか。今日気になる事とかありましたら。

(委員)

市民投票について、最終的にどのようになるのですか。

(事務局)

市民投票については、7件を想定していますが、前回説明させていただいたように映像

を見てもらうのと前回の委員会で映像だけでなく紙版で見てもらうのもいいのではないかと言う話がありましたので紹介するような写真を貼った説明するボードも準備できたらと思います。映像については、テレビなども必要になるので場所の状況によって映像にするかボードにするか決めてそれを見てもらうことで活動を知ってもらうこととなりますので、箇所数が増やせたら、増やしたいと思います。投票場所については最初に市役所とショッピングプラザアピアで考えていましたが、コミュニティセンターや図書館などご意見もいろいろいただいたので、そういうことも考えたいと思います。インターネット投票は、まちづくりネット東近江のホームページで行います。

今日「わくわくこらぼ村」の参加団体募集のチラシを出していますが、12月12日が「わくわくこらぼ村」の開催日ですがそれに向けて参加団体を募集しており、11月6日説明会をしますが、その会場でも約100人ぐらいは来られるのでいい場所であるので投票をしていただければと思っています。それと選考の際の市民投票の反映方法ですが、身内票で何票も入ってしまうことも考えられるので検討が必要で事務局では選考委員さんが15名なので市民投票分は選考委員さん1名分の点数の持ち分にするということで考えています。前回委員会でいただいた意見を基に少し変更してします。

(委員)

私たちが選考するのは2次選考だけ関わるということですか。

(事務局)

11月26日が最終選考になりますが、それはこの委員会でしてもらいます。想定で7つのところのヒアリングの結果と市民投票、ヒアリングの内容を含めて最終的な判断はこの委員会をお願いします。

(委員)

市民投票は何をやるのですか。

(事務局)

市民投票は最終選考に残った7つの団体の活動を紹介する映像や紹介ボードを見てもらい、市役所ロビーなどの投票場所でアンケート形式で7つの団体から選んで投票してもらいます。

(委員)

例えば10人いれば10点、こちらの事業は5人いたら5点と入っていくわけですね。7チームあれば7チームに点数が入ってくるわけですね。

(事務局)

点数は1票をどう換算するかはありますが。

(委員)

数がいっぱいあろうが少なからうが、最終的に大賞とかを決めるのはこの委員会で決めるということですか。そうだと市民投票の意味はどうなるのか。

(事務局)

場合によっては市民投票が多かった団体には、特別賞と言うことで市民賞のようなものになる可能性はある。

(委員)

投票する市民からすると、自分が市民投票した団体がどうなるかというのがあると思う。

どうなるのか。どうにもならないのか。

(事務局)

反映はもちろんします。

(委員長)

今のこの提案は最終選考のところでもう一度我々が点数をつけます。それが50点満点だとするとその市民投票を50点満点に傾斜配分した点数をそれぞれ1人分としてそこに市民投票と言う人がいるという扱いで50点もたせるということです。

(委員)

市民投票で自分の一番良いと思ったものに投票してそれを集計して市民投票の結果を入れるわけですね。

(委員長)

ここは、本当に協働が評価されるかということは、我々が狙っているものがきちんと審査されるのかというのはあまり期待しない方が良く個人的には思っています。それよりはこういうものがあるということを知ってもらえる機会にするというぐらいの扱いにしておかないと、本来我々がやってきたことが動員票で選ばれてそれだけでということになると、本来の趣旨と言うところからすると、それだけ動員までやったことを評価しても良いと思いますけれども、本来の趣旨からずれてしまって共感性が低い所が大賞になってもあまり意味がありませんので1人分ぐらいに抑えたいというのが趣旨です。我々にとっては、市民の方がたくさん投票したというのが見えますのでそれは私たちも現実的な当落で同じ点数がついていてどちらを大賞にするかという時には大きな決め手になるとかそういう風な取り扱いをすればいいのかなと思っています。それで1人分の16分の1に換算するというルールでいきたいというのが事務局の提案です。

(委員)

次回に資料3みたいな形で基準があるのですか。

(事務局)

最終審査でこの基準でいく予定です。

(委員長)

2次審査は一つの項目で総合ひとつですから3次審査に今日用意入していただいたものを利用しようというのが今の流れです。

(委員)

市民のところを書いていないから。

(委員長)

もう一度整理します。みなさんの共通認識をつくりましょう。今仮に資料2のところでは基本的にはこのシートで、今だと60点付けます。私たちがそれぞれ資料2のような形で7つの事例に満点60点ずつで入れていきます。市民の人たちも市民審査委員が1人いるというイメージを持っていただいて、例えば市民投票で100点の団体と50点の団体があるときに60点と30点をつけたとみなしていくということです。1人の30点が入って、私たちの点数と合算されて評価するという形です。60×16ということは960点です。市民投票分という点数の合計に付け加えさせていただく。1人分付け加えさせていただくということになると大きな影響はないと思いますが、多くの皆様方に参加をしてい

ただくという機会にする。これでよろしいでしょうか。これでやってもみましょう

広報していただくと同時に、申請用紙を書かねばならない人はたくさんおられると思いますがぜひ良い事業をエントリーしていただきたいと思います。

(委員)

聞き間違いかもしれませんが、こらぼ村で投票するとおっしゃったと思いますが。

(事務局)

こらぼ村の説明会です。こらぼ村で表彰します。

(委員長)

協働大賞に関してはこれで終わりたいと思います。副委員長が紙芝居を作ってくださいました。私は事前に見せていただきましたがすばらしいです。披露していただいて、市民協働推進委員会作成として活用していただいたらどうかと言うご提案をしていただいていますので良ければ協働推進委員会作成と言うことで拍手でいいんじゃないかと言うことでお願いします。

【紙芝居】「協働って何？」と題した協働の紙芝居を披露していただいた。

(委員長)

この協働委員会で作成というということでよろしいか。

(委員)

拍手で承認

【協働ラウンドテーブルについて】

(事務局)

9 ページの資料 6 と資料 7 に基づき説明

現在ラウンドテーブルについては3つの部会について分かれて検討いただいているが、情報共有ができていないこともあるので、3つの部会の情報共有を行うとともに、10年後の東近江市のラウンドテーブルについて目指すべき姿について議論していただきたい。ここでは各部会のテーマについて具体的にするのはなく、ラウンドテーブルについてまだまだいろんな方のイメージがわきにくいということもあるので仕組みの検討について、あるべき東近江市のラウンドテーブルのあり方を意見交換していただきたい。実際に今3つの部会でやり始めた中で開催に当たって課題になったことがあればそれも共有していきたいと思います。

(委員長)

今日はそれぞれの部会が今どういう状況かということをご報告いただいた後に、今もありましたがそれぞれの部会の中身を議論するのはそれぞれの部会をお願いしたいと思いますが、フレームとしてももう少しこういうことを議論したほうがいいのかということがあればお願いしたいです10ページのところに昨年皆様方と議論した資料のところで言うと、ラウンドテーブル自体は、真ん中の図のところに書いてある課題の見える化し、多くの市民の人たちと共有をすると、それが共有できたところから新しい動き、協働事業の提案とかいろんな解決に向かった様々な人たちが動き始めるということが究極のゴールだということはこの間作りこんできたことですね。だからそういう意味ではある意

味でどういうふうに多くの人たちに情報共有するかとか知ってもらえるとか、ある意味こういう人と呼んでとか、全然今まで接点のない方や情報を持っていない人たち、けどこの人たちには知っておいてほしいよねという人たちにあえてラウンドテーブルのテーブルについてもらって議論したりするということも含めてあり得ると思いますが。今まずは各部会でご議論いただいていることを簡単にご報告いただきたいと思います。9ページにレジュメを作ってきていただいています。資料6ですが、福祉部会、コミュニティ・産業部会、若者部会と言う形で3部会の部会で議論していただいていることをと思います。それでは福祉部会の方からよろしくお願ひしたいと思います。

(委員)

部長が欠席なので私から報告します。福祉部会では、高齢者や障がい者の移動をテーマにして勉強会をしています。移動は買い物に行けないとか、災害時に避難所に移動できない方がいるとかお出かけするのに駅へ行けないとかそういう移動が難しいという方の問題をどう考えるかということテーマにしています。テーマが広すぎるので何かそれとラウンドテーブルのイメージがメンバーで違うので、なかなかイメージがしにくいという話があったので移動について、実際にどんな困ったことがあるのかとメンバーの中で話してその中から、バス停がないので困っているという投げかけがあったのでそれについて、具体的にどんな形で解決できるかやってみようということになった。やっているうちにラウンドテーブルのイメージがメンバーで共有できるのではないかということになりました。まだ1回しか打ち合わせをやっていないので次の回に検討したいと思います。現在の進行状況ということではそんな形で進んでおります。

(委員長)

コミュニティ・産業部会のほうよろしくお願ひします。

(委員)

コミュニティ・産業部会です。私たちの部会も、私自身仕事が繁忙期でみなさんに声をかけられていなくて申し訳なかったのですが、その間話せるところだけは話してはいたのですが、福祉部会がおっしゃたように私たちも範囲が広すぎるなあというのが率直な感想でしてどうしていったらいいのか漠然とした中でメンバーの中から先週末に八日市の商店街でワークショップをするということがあったその報告をしていただきたいと思います。

(委員)

8日にやったワークショップについて、今配布したものが当日参加者にしてもらったワークショップの内容です。ラウンドテーブルで議論した内容は「中心市街地における商業地の機能は何か」ということでそれを考えて探っていこうということでした。メンバーの中で話してラウンドテーブルの運営委員会の中ではまちづくりとかにかかわる団体の会長さんとか自治会の方を呼んで話していただいたらどうかと言う話がでたのですが、もう少し使っている人たちにどうやって話を聞いたらいいか漠然とした課題として持っていたところアプローチの地域と内容からして大学で関わっている事業でやっているエリアや内容が被るところがあったのでヒアリングと言うワークショップ形式でやってみました。1つは商店街を舞台にいろんな方からお話を聞いてという形で「どんな店があったらいいな」とか「どうなったらいいな」というイメージを書いてもらおうということで、道行く人とやつなぎマルシェという若い子育て世代のお母さん方がよく来られるようなマルシェを同

時にやっておられたのでその場で来られた方にお話をお聞きして声を集めました。そのあと、もう少しそのあたりりの声を中心に少し固定した参加者の人たちから「商店街とはどういうイメージのものか」とか「商店街のあり方とは何か」ということをワークショップ形式で話しました。ラウンドテーブル地域や商業の関係者の集まる場をつくったらどうかということをしやべっていたのですが、8日にやらしていただいたのは利用者の人の声を中心に聞く形になりました。これをどう使っていくかということが、「商業地の機能は何か」という大きいテーマなのでどういうふうに解消されるものではないので、どこにゴールがあるのか少しわからないので市民の声とかからそのあたり今後のアプローチを考えていきたいと思っています。

(委員)

とりあえずやってみようということでした。これのもう少し前に話す機会がありましたので一緒に話をしたのですが、今一度「協働とは？」と言う話と「ラウンドテーブルとは？」と言う話がいまだに落ちてこないと言うのが実感としてあるし、今回の議論のテーマで10年後と書いていただいています。1年後どうなのか、3年後どうなのか、5年後どうなのかということを含めて、例えば資料7に沿って考えて、1番のことを今この部会で少しずつ考えていくべきなのか、2番の事の動いていくことをこの部会で話し合うべきなのかしくみなのか実行なのか迷いがある。いざ動いてしまうとそちらばかりに気持ちがいってしまうのでこれでいいのかという疑問があります。それを皆様と一緒に話をしていきたいと思います。これから先は申し少し部会として話し合う場を作りたいと思います。現在のコミュニティ・産業部会の状況です。

(委員長)

それでは若者部会よろしくお願いします。

(事務局)

今日はリーダーが欠席なので代わりに報告します。若者部会はこれまで3回企画運営会議と言うことで持ってきました。若者ということで当初からニートと社会的孤立をテーマとしてやっていきたいという話で、最初はしたらそういう人を発見とか引っ張って来られるとかか導いて行けるかという話をしていたのですがだんだん話をしていく中でひきこもりやニートの人が活躍できる場がきっとあるよねと言う話から、その人たちを支援するというよりその人たちが地域を支えることをしていけないかと言うことで、地域の困りごとの中にそういう若者やひきこもりの子が活躍できるようにマッチングできたらよいよねという展開になってきて具体的に9月14日にラウンドテーブルをしようと言う話になっております。今日チラシとか簡単な資料を付けさせてもらっていますが、真ん中に円卓のような絵が書いているチラシですが、今度市辺コミュニティセンターに置かせてもらおうと思っています。全地区でするのは難しいので、市辺地区の関係者が多かったのでまず市辺地区を舞台にやってみようということになりました。市辺地区にもひきこもりの人とか結構いるよねと言う話もあったのですが、特に農業の盛んな地域なので農業の後継者や担い手がおられないということで困っておられたので、困りごとの中にきっと若者の活躍できる場があればいいよねということで「市辺地区を真剣に考えている人、特に農業の関係を考えている人、特に若い方に声かけをしながら集まってもらったりとか、福祉系のほうで若者が地域で活躍して成功した事例を知っている人に集まってもらってそう

いうラウンドテーブルを9月14日第1弾としてやってみようという話になりました。「若者が輝けるまち市辺～仕事・役割・活躍できる場をつくりませんか」というタイトルで進めていこうという話をしています。

(委員長)

今それぞれのチームで皆様方が実際にやりはじめてみて、どこに向かっていくかが見えないということです。そこでもう少し揃えていけるというか、そろえる必要もないですが、このあたりを作りこんでいけばいいなということがみなさんで共有できればいいと思います。この間議論してきたことを思い出していくとこれ自体は普通のワークショップじゃないということがひとつあります。普通のワークショップじゃないというのは言い方は悪いですが。例えば課題が何なのだろうという課題出し合う場だけでは終わらないということです。それを解決していくとかその状況が少しでも良くなるようにみんなが知恵を出すとかその問題に気づいていない人たちにあえてその場に来てもらうことによってその問題に対して少し認識を高める。例えば今の若者部会で言ってもらったような形で言うと一つは困っている人にちゃんと発話をしてもらうことが大事ではないかと思います。今の若者部会の例でいくと例えば引きこもりで困っている人は誰ですか

(事務局)

本人たちは困っているのかどうか問う話もありますが親も困っているのではないかと。

(委員長)

本人が困っていることを言えればいいが言えない場合は、例えば親やそれを支援している人が、イメージとして自分たちの地域でいわゆるニートや引きこもりや課題を抱えた若者が実はいるのだ。その人たちはこういう状況で街に出られないし、こういう状況だということをその人か本当は本人が言えればいいが支援者や家族がそういうことを話してそういう情報がある意味でシェアしていく中でどういうことができるのかとかそういう人たちの仕事とか役割や活躍できる場を作ろうというのがこのラウンドテーブルの役割だとするとそういうものを作れる立場の人とか今おっしゃるように逆に言えば農業は人手がなくて困っているとか、製造業の人たちが困っているとかそれをつないでいくためにはどうすればいいのかとか農業で人手がなくて困っているという人と引きこもりの回復期にあって少し就労みたいなものができるような状況になってきた人がいるとするとそういう場につながっていくとひとつ解決と言うかそういうモデルが地域の中で見えてきてそのラウンドテーブル自体が地域の中で課題があるという情報を共有できる、リソースを共有する場になる。それができるとひとつの大きな地域の中で課題解決して例えば、農業系の人と福祉系の支援している人たちがつながることである意味協働が起こって解決とかちょっと足がかりできる。体験で農業を手伝う少しプログラムつくろうかということが始まると、少しラウンドテーブル的な課題を共有して実際の課題解決のアクションにつながっていくようなものが、何回か対話を重ねるうちに見えてくると面白いと思います。皆様が議論されているテーマはそれぞれそういうものが含まれていると思います。一般的な課題と言うよりも明確に困っている人をイメージしてその状況をシェアできたりとか、どういうものがあればいいのか具体的に解決するためにどういうステークホルダーの人たちがテーブルについてもらえばそういうものが議論できるのか、だから普通のまちづくりとかやワークショップと違うのはそのことに興味のある人たちだけが集まっても何も変化は起きないのです。いつ

も議論している、例えば福祉系の方は福祉系の人たちだけで議論していても変わらないのである意味でこういうことをやるからということで、いろんなユーザーを巻き込むことによってそういう課題をシェアしたときに、今までなぜ言ってこなかったのかとか、そんなにきれいに起こらないとしても、今までその課題に触れるチャンスがなかったり触れてこなかった人たちにもそういう情報を共有することで、新しい課題解決の道が、これだけ課題がある意味飽和的になってきているので、関係者の方たちはかなり議論しているのです。でも超えられないということをいろんな立場の人たちが議論することで新しい活路を生み出そう、解決方法を生み出そうというのがこの間議論したラウンドテーブルの姿だったのではないかなと思っていますそういう文脈において少し今それぞれの部会で議論されていることを実際やっていくと見えてくるのではないかと私自身はそんなイメージを持っていますがどうでしょう。皆様方それぞれの部会に落とし込んだ時にそういう方向性でいけるのかそれともこういうところを全体で確認しておいた方が良いことがあれば議論していただきたいと思います。いかがでしょうか

(委員)

この前話し合った時に、拡大する時に人をどう呼びに行くのだという話になって、あいさつに直接行った方が良いのか、手紙で照会したほうが良いのか手紙は誰から送られたというふうにするのかという壁で止まりました。

(委員長)

どうしましょう。

(委員)

同じような話をこの間の今日の前に会議を持ちました。この前の何会議でしたか？

(事務局)

先日、連絡会議ということでリーダーさんに集まってもらいました。

(委員)

この間リーダー3人と何人かで集まって話をさせてもらいましたが、この推進委員会が具体的にラウンドテーブルを開催する協働サポーターになれるといいよね。このメンバーが協働サポーターイコール協働アドバイザーであったりとか、具体的に私に言ってくれたら私自身がわからなくても、私の知人でその話が解決できる人がいるよという話ができたら良い。私たちが協働サポーター、もしくはそれ以上の方に協働サポーターになっていただけた場合に市辺地区で若者のラウンドテーブルが開催されたという時にここのメンバーが少なくとも何人か行けるといいよね。ラウンドテーブルしていただいた結果の議事録をどこかに集約される場所を作っていく必要があるのではないのかな、それが協働委員会の一つの役目なのかなと話していました。東近江市と考えた場合に市辺というところからはじめるととても小さなコミュニティで東近江市の中にいくつあるのか。これが何百のラウンドテーブルが開催されることを私たちがめざすのであれば、何百と上がってきた議事録を集約するセカンドステージその上に、サードステージ、その上にトップステージがあるというピラミッド型の組織を作っていくべきなのですよ。

(委員長)

今の重要ですよ。どういうイメージの議事録を集積したほうがいいのですかね。

(委員)

困っていることがあがっていく形ですね。

(委員長)

それをぜひやりましょうよと言う感じなのですよ。とても大事ですよ。将来像でいくと、例えば困っていることがそういうふうにあがっていくという政策化していくイメージもひとつですよ。例えば地域にこんな人たちがいて困っているということを住民の人たちが話し合っただけが見えるようになってきた時に自分とこもだというような。いろんな人たちがラウンドテーブルで話し合っている課題とか、どんなことを話し合ったかという簡単な議事録っぽいものがオープンソースになることは非常に重要です。それが例えば福祉政策を役所の福祉課が考える時に10年後の私のイメージでいくとそれをみればわざわざ審議会をつくらなくても、そこをみれば住民のニーズがある程度見えて何に困っているかわかるというのはさっきのトップステージの話でいくとある意味での福祉の総合計画みたいなもの考える時にそういうもの土台になっていくものになる。いろんなことをこの人たちに聞きに行ってみようとか考えるようになっていくのがひとつの姿だと思います。本当に自分たちが動いたことが法律や政策になったりすることは一つある。それは少し長いスパンで蓄積していけるとそういうことが起こるかなということは確実にある。あと一つは住民間でこうやって話し合ったら例えば、さっきの話で行くと農業やっている人たちがのってきて、こういうふうに解決した。こういう人たちが一人でも働き始めると成果が見えるとうちでもやってみようとかうちの商店街でもやってみようとかいうことが起こってきます。それが横展開の話です。さっきのトップの話を経ると今は横展開のところ、あそこの集落で例えば交通の問題で話していていい感じになってみんなが考え始めた、それを横で見ている人たちがうちでもやってみようという横展開としても大事だと思います。今おしゃっていただいたWEB上で、それをきちんと蓄積したり発信したりということは大事です。今皆様の話をきいていると横と縦みたいな話の中で、いろんな意味がそこに蓄積していく。

(委員)

具体的にそろそろラウンドテーブルをするという時にこのチラシをいただいたのでこれを参考にさせていただくので、対象を「市辺地区について真剣に考えている人」とある。これはかなり勇気がいると思います。真剣に考えていない人は来なくていいのかとか。誰が真剣に考えているのかとか。

(委員長)

これでいくと、これではダダの寄合になってしまいます。この中でラウンドテーブルは戦略として設計しないとダメです。誰が最低限ちゃんとテーブルに着かせる人と聞きに来る人は別です。聞きに来る人たちも当然あとで議論してもらっただけで最初はきちんとやっばり誰か。

(委員)

もちろんこれは決めていますよね。

(事務局)

裏では声かけするのは営農関係者とか若者の入った成功事例を知っている人とかですが表向けある程度公にしておかないと勝手にやっているというのはダメなのでという意味のチラシです。

(委員)

具体的に名前もあるわけですね

(事務局)

1本釣りに近いです。

(委員長)

ではばっちりですね。

(委員)

その部分のファシリテートの部分が非常に重要ですよ。スキルがかなり要求される。その部分把这个推進委員会としてこの間話し合った時にはその話を言ってくれてもう後戻りできないことになってこの推進委員会は10年やっていくのですよねと言う話になって。そのぐらいやっていかないとできないでしょうということ言ってくれたわけです。すごいこと言っているという話になったのですが。結局協働サポーターという協働アドバイザーになろうとするならば協働ファシリテーターになろうとするのならばかなりのスキルが必要です。

(委員長)

今、大事なことを言ってくださったのですが実は円卓会議やっていくとそこが見えるのですよ。実は後戻りできない。ひとつは年数を蓄積していきましょうといくことでいくとある意味で運営委員会を外出しましたよね。この推進委員会は行政が、東近江市さんが私たちを呼んで作っている委員会なので、それを若干スピアウトした形で運営委員会を作ったというのは、たぶんどこかで皆様方が覚悟をしていただいたと私は勝手に思っています。そういう意味では私たちがずっとやりつづけなくてもいいと思いますが、しくみとしては10年後も残っていきたいのでそういう意味ではいろんな人たちがラウンドテーブルが大事だということをおわかってもらって運営にも参加してもらえよう人をお増やしていかないと10年間同じメンバーでやる事が東近江にとっていいことだとは思わないところがある。そういう意味では運営委員会自体をどうしていくかということをおもう少ししたらもっと真剣に考えないとダメだと思います。その前段としてこのラウンドテーブルが意味あるものでとても大事だと思ってもらえないと増えていかない。10年やる意味がないということでとりあえずやってみよう。トライアンドエラーを繰り返して形を自分たちの東近江市モデルとしてのラウンドテーブルをつくりあげていって、それによって救われたとかそれによって新しい出会いがあつて自分たちは困っていたけどちょっと解決の道筋が見つかったみたいな人が出てくると運営するサイドにも回ってきてもらえると思うのですよね。そういう人たちをどんどん捕まえていかないといけないと思います。そういう意味では今私たちはプロトタイプを生み出す仕事をしているわけです。かたちをつくる。今かたちがないのでみなさんそれぞれいろんなイメージがある。それはそれでいいと思います。一回やってみながらこういうふうにおこの人たちが喜んでくれた。実際にこういうことが動き出したというようなそういうことがどんどん蓄積していかれるかどうか、それがひとつ大事な事、それと今ものすごく大事なことを言ってくださった。ファシリテートする人、司会進行する人がかなり大事なわけですね。そこは私もいろんなことを考えて進めていくとそこがものすごく大事だというのは今おっしゃった通りです。そういう人たちの研修や実際やってみるといのはどこかで必要になって来ると思

ます。9月14日には誰がどうするとかあるのですか。

(事務局)

ファシリテートを誰がするとかはまだ決まっていなくて次のチーム会議で決めたいなと言う話です。

(委員長)

そのファシリテートする人を徹底的に鍛えていく。時間ないけど。いくつかポイントはあるのです。やっていこうとすると。実際にやって、我々もできるだけ見に行かせてもらうことも必要かもしれない。そういう課題が見えてきた時に我々も含めてラウンドテーブルのファシリテーターとか進行役ってどういうものなのかということ大事かもしれない。全国で先行してそういうノウハウをため込んだ人がいるのでそういう人に来てもらって研修をやるのも良いと思います。私が全国で出会った中で良いと思う人が沖縄で1人いて、年間20件ぐらい月1回絶対やっている人がいて彼に来てもらって講座をやってもらってもいいと思います。そういうのはものすごく核心的な部分でただ話し合いをしても成果につながらないのでそういう機会を作りたいと思います。大学で彼を全然違う文脈で呼ぶ時がある。交通費や謝礼を出せるので、お金をかけずにできるのでちょっと興味ある人たちが自主勉強会をしても良い。

(委員)

ラウンドテーブルの言葉とか定義とか、この前の連絡会議の中でもおっしゃっていたのですが、私たちがこれからやろうとしているラウンドテーブルに関してはほぼ同じことをすでにやっておられる人もおられるよねという話ももちろんあってそことの関係も含めてどのようにしていくのとかバランスとかおつきあいの仕方とか、そのラウンドテーブルは全然違うのかと言うこともある。

(委員長)

ラウンドテーブル自体は円卓の会議なので日本全国でいろんなところでやっています。例えば沖縄でやっているのは大きなテーマでやっているのだから「地域」と言う感じではないです。例えば私が実際見たのは「ミイバエ」という魚が沖縄にあるのですが、おいしい魚なのに流通しない。なぜなのか、こんなに人気がある魚なのになぜ流通しないかと言うラウンドテーブルでした。困っている人、例えばホテルの料理人はミイバエを出したい。ないかないかと聞かれる。なぜないのか、いかにおいしいか、いかに県外の人たちに人気があるかと言うのをプレゼンテーションする。一方で養殖している人、県の水産政策を決めている養殖政策いろいろやっている県の担当者、主婦、お魚屋さんもいる。そういう人たちとあとホテルの使う側の困っている人が発話して、あと一人、養殖業者の人が発話して、そんなふうに言ってもらうけどこういう現状がある。養殖の現場はこうこうこうでこうなのだと今言ってもらうのは量を供給しようとするとうボトルネックがここにあるということを書いてくれるわけです。俺らだけでは解決できないのだということを書く。そうすると状況がわかるわけです。作り手もなるほどと、そういう状況を話していると期待感がある。これって解決できたらもっと沖縄の食文化がいろんな人に伝えられると。いろんな人がいろんなアイデアがでてくる。県の水産政策やっている人がこういう補助金あるからこういう形でやれば料理人さんたちと一緒にこういう事業をこういう形でやればボトルネックの今の半分は解決できますよね。そうすれば水産業これだけ伸びますよねと言う

話になる。そういう少し、県単位のレベルの話とか、もう少し地域で、例えば東近江市で根付かせる話と少し違う。スケール感も持っている。そういう意味では東近江らしさや、自分たちが、先ほどおっしゃったような協働サポーターが増えていくとかこの運営委員会自体が市民運営で行われていくというような運営する側が増えていくというのは全国にない。何が東近江市のラウンドテーブルかと言うのは自然とそういうところから形成されていく。最初から私たちのラウンドテーブルはこうだと言わないほうがまだまだいいと思います。今おっしゃったところでいくと進行したりとか、どういうふうにかこれを持続性を持っていくかです。

(委員)

話をしている時にD Oの話をしてくださっているほうが魅力的なのですよ。そちらに行きたくなるのです。その時に我に返って自分はリーダーを拝命させていただいて、やはり俯瞰に戻るべきだろうという自分と若者かなぜ呼んでくれないのかという自分とが戦っていくわけですよ。この部分で今年度末の3月ということイメージしたりとか、自分たちの任期がいつまでだったかと言う、残り時間で考えてしまうと俯瞰もしくは、組織づくりもしくはしくみ、3年後のビジョンと言う話を進めていくことが肝要なのかなという気にもなる。気持ちとしては確実にこの人たちの話に入っていきたい。

(委員長)

今のところ、今までの整理で、皆様そうだよねと言うことであれば、まずは当面プロトタイプを作らないとダメなので。やってみる。だから3つの部会に分けたのもやってみようということなのですよ。ブレーキをかける気持ちを少しブレーキを外してもらって、個別のやつをやってみてトライアンドエラーで試してみるというのでいいのではないかと思います

(委員)

そこをわかりましたといった上で話すと連絡調整とか各部会からあがってくる進行についての連絡調整の形とかひとつひとつこの場で話していくと時間がかかると思うのですよ。協働推進委員会全体会議の場でひとつひとつのコンテンツについてしゃべっていくのは。その上でせっかく協働サポーターになろうと思える方々が集まっているのに情報の共有がしにくいのはもったいない。

(委員長)

そういう意味では時期的には運営委員会と言う組織を立ち上げて、実態としてはこの委員会が終わった後とかにやっていましたが月一でも少し私も決めてもらえば来ますし、当然役所の人たちも一市民としてどんどん入ってもらって、興味のある若手の職員にもそそってもらったりしながら運営委員会を別途設定したほうがいいという気はしています。そこは、かつ、まちづくりネットさんにも過度な事務局的な負担はさせられないので日程調整ぐらいのところはしてもらおうとか電話番号借りるとか連絡先になってもらうという文脈で、知らない間に連絡先になっていても困るし少し報告しあえたほうが良いのでお願いできればと思います。提案としては月1ぐらいラウンドテーブルの運営委員会が行われるといいなと思っています。3つの部会がとりあえずプロトタイプを作っていくとここがものすごい大きなスタートになりますし、お互いに助け合わないといけないと思います。若者部会がやるのなら例えば、ファシリテーター誰かやろうとか、記録とるのをこの日行け

るし雑用ならやるよとか、受付ならやるよとか写真撮る係ならやろうかとか、それぞれのチームが融通し合ってそういうことをしながら場数を踏む。提案としては月1の運営委員会、月1でなくてもいいですがもっと柔らかい場でやるといいと思います。そういう場所ってあるのですか。

(事務局)

市役所以外の場所ですか。

(委員長)

少しそういうものをいろいろ織り交ぜながら。いろんな議論しながら目標としては先ほども申しあげたように困っている人を孤立させずに、困っている人を応援している人も今は孤立しはじめてるのでそういう人たちにいろんなリソースをつなげていくのはまさしくそれが協働状態になっていく。そういうものをつくとあとは走っていくと思うので今私自身がお聞きしたテーマで部会それぞれいいと思うのです。できると思います。それぞれ災害時の移動とかというのも移動困難者という観点で、私はどうしたらいいのかと言うことを言ってもらったらいいいと思います。どうしたら良いのだろうかとか。個人情報や壁とかいろんな壁が今あってまた見えづらくなっていますよね。そういうのも見殺しにしましょうという人は絶対いないわけですからどうにかしなければいけないというところから議論がスタートするはず。しくみなのか実行なのかということも両方大事ですが、とりあえず実行しながらしくみ化していく。しくみから実行しながら蓄積しながら組織化するほうがいいものになっていく気がします。今年度実際やってみる。たぶん1回やると次が見えてくる。次はこのテーマでやりたいというのを参加者の方から言ってくる。重なって来るとチームが自立してやっていく。

(委員)

先ほど若者のラウンドテーブルの説明がありましたが非常にイメージが楽しみだと思っています。産業も実はまるまる関係してきています。個別のラウンドテーブルですが実は同じステージでできる内容だという感覚で進んでいます。どこかの時点で交流を持っていかなければならない時もあるだろうと思います。それと広域化です。たまたま市辺地区でやりますが、産業分野に届いていくようになると思いますので市辺だけで吸収できない可能性があります。ラウンドテーブルで必ずでてくるだろうという想定でその場合どこに行くかというのもすごく重要な別の手立てになってきますのでそういう時に別のエリアでやっていくあるいはもっと広域でいろんな情報を持ってそこ飛び込んでいくことによって展開力もできてくる。一つのきっかけ、動きが次から次へグループができて来て、スタートがここであって、そのグループの中で次のラウンドテーブルが派生的に生まれてくるという発展的なイメージです。できるかできないかは別として、なんとなくいいですね。そのためにはしかけが必ずいるだろうというので、それぞれの団体の方にピンポイントで声かけをしておいて、なおかつ一般の人にそれを知ってもらうチャンスを与えるという意味でこの熱心な人という声かけ方法もする。先ほど委員長がおっしゃたように実際ラウンドテーブルをするとこちらのほうで聞いている人がたぶん出てくると思うのですがその中で良い意見がでてくると今度はその人たちがそこに入って来るという構図が生まれますので、やりだすことによっていろんなしくみが見えてくるかなと思いますのでやってみていろいろ作りあげていく感じ。ここはすごく良い質問をされたと思ったのは情報の蓄積とい

うか集積していく機能は素人ではハードルが高い。そのあたりすごく大切だし誰がどう担っていくのかなというのはここで議論して持つておかないと、どんどんできていって情報もいっぱいある。しかし誰もわからない。窓口がわからないという可能性もあるし、このあたりも考えていかないといけないですね。

(委員長)

たぶん今おっしゃったことは重要でそうやって何の情報をどう蓄積していくかも我々が経験値として積み上げないといけないと思います。そういうものが、やりたいということが次々起こってくればこの運営委員会の仕事としてはその時のファシリテーターこの人に行ってもらおうというように調整しますとかいろんなそういう調整かもしれないし。情報をここにあるので当日この項目だけはアップしてねということが言えれば蓄積になっていく。ではどういう項目、記録を蓄積すればいいのかということも今からこなれていきながら何を蓄積していくと今みたいなことが促されるのかということ私達は考えていかないといけないということでしょうね。

(委員)

一つの方法としてはデータの蓄積よりもこういうことをやっているという実態を見せていく。それがすごく展開になっていく。この市辺地区のもともとのスタートがどこにあったかと言うと中野地区のふとん乾燥か何かのラウンドテーブルをすでにやっているという話を聞きまして、そういう感じでいいのかなというので考え出して、そこでやっているとまく言った事例があるらしいのでやってみましょうというそういう何かきっかけがあって私達もやってみました。それを見た人がああいうやり方をすればうまく解決するのではないかというイメージを持ってもらってまた生まれていく。確実にどうなるかわからないけれど可能性を多くの市民がそこに発見して次の展開をする人が増えてくれば非常に多くの人動き出すかなという未来志向です。

(委員長)

イメージとして10年後ということというまの困ったことをここに持ち込む人が役所に持ち込まなくなるということです。そういうものをあそこに相談すればどうにかなるとかみんなで議論してもらえる。そういうことがわかってくると困りごとが集まってくる。そういうことが協働の社会としてはみんなができることを考えようということになると行政との関係も変わりますよね。そういう意味では協働で今まで議論してきたことが自然にまちの中で行われるようになってそこには当然行政も当事者としていたりするところという問題があるのを知らなかったこれ、急いで何ができるか考えますということがまちの中で自然と行われていくと自治の姿として見ると、今の議論からして見える。そこに行くためには私たちが何をしなければならぬのかということの中長期的にはそういう場面として考えると非常におもしろいと思います。逆に今みたいな話が通用する地域は他にありません。皆様、今こういう議論をしていると、なんとなくだまされているような感じだけれどもイメージを持たれるじゃないですか。皆様、今みたいに困っている人がいてこうしてとか、このようなことを全国で私もいろいろ関わっていますが、今みたいな本質的な素敵な議論が行われる場所、地域なんて私は知りません。そういう意味でいうとみんながスピンアウトしてまでやろうなんて言っているこんな変わったところはない。そこを私たちの強みとし、こういう人たちが東近江市にいるという、たまたま集まった人たちがこう

いう仕組み作ろうと言っていること自体が東近江市の強さなのだと思う。今日の議論は大事な論点が出ましたのでこういう論点を掘り下げていくためにも運営委員会を定例化していきましょう。その運営委員会がこなれるまで、申し訳ないですが市役所とまちづくりネットと日程調整とか連絡調整とか業務としてシェアしていただいて、早くその運営委員会として自立できるような絵を書いてみたいと思います。積み重ねながら先10年やめられないぞと言う覚悟を皆様決められた。私自身は皆様のご報告と議論を聞いてすごく感動しています。これやれるぞという話と見ている方向感としてかなりすごいことだなあと感じます。それぞれの立場から持ち込みたいということがたくさんあると思います。今は支援する人たちが抱え込んでいるわけです。あなた方は専門家なのでどうかしなさいと投げているわけです。役所もそうなのですけれども。それを吐き出せる場所があって、なんとかしようと思っている人たちがいる場所が作れるだけでも相当意味がある。そういうものを私たちはめざして、息切れする時はしたらよいと思います。みんなで支え合いながらそういうイメージが作れるといいと思います。昨年議論したことはそういうことなのではないかなと思います。今日は時間が過ぎていきますので、ラウンドテーブルとしてはそれぞれの部会を加速させていただいて、プロトタイプを作る、何パターンかきちんと見せていこうというのが私たちの今のミッションだと思います。若者チームのラウンドテーブルも素敵だと思います。私もぜひ行きたいと思います。非常に大事な局面だと思いますのでぜひがんばっていきたくと思います。ラウンドテーブルでもやもやしたこと、論点が他にあれば出していただけますか。

(委員)

今更水を差すつもりはないのですが、チャンスとしてとらえてほしいのですがネガティブなほうの話も焦点をあてておいてほしいと思います。「若者が輝くまち市辺」というテーマにおいて一番気をつけないといけないのは近すぎて怖いという話です。その家の話私できないわということが出て来るといふ懸念についてこのラウンドテーブルでどこまでその話ができるかということ。絶対どのラウンドテーブルでも小さいコミュニティだと出て来る話なので。

(委員長)

テーマ設定の仕方によってその問題だったらこのぐらい広げておかないといけないとか個人の弱い、課題抱えている部分だと最低でも八日市ぐらいのエリアで語ったほうがいいねとか、いやいや実はこういうのはこういう関係さえ作ればこのぐらいの地域でもやれるぞとかそういうのはあると思うので。近くてできないとか議論しづらいというのは当然あると思うので。少しやりながら議論がうわすべりしていくよねこのエリアだという話は、そういうのもみんなが見に行くと、そのチームの回すことで大変なのでぜひ他のチームの人が見に行く。

(委員)

もちろん部会でもその議論は出ていたが。あえてそういう方向、矢印の方向を変えてしまおうということを考えています。うまくいくかどうかわかりませんが。

(委員長)

ありがとうございました。非常に真摯にやっていただいていますし。わくわくします。失敗するとかリスクもあるけれども、やってみなければわからないこともあります。皆様

がひとつひとつクリアしていこうとされているので心強いですし、いいものにしていきたいですね。東近江の自治はこうやって市民の人たちがつないでいることをかたちにしていければなと思います。

連絡事項として第9回の委員会の日程があがっています。事務局お願いします。

(事務局)

19:30になっていますが、応募件数が多ければ18:30開催とします。応募状況によって事務局から連絡します。

(委員)

月1回のラウンドテーブル運営委員会の日を定例化したほうがいいと思います。

(事務局)

委員の都合を調整し、10月から第4火曜日で定例化することに決定する。9月は祭日に当たるため15日(火)とします。

※閉会